

教 仏 名 聞

第 175 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 4 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

すべては見方 佐々木蓮磨

豊後の大儒(儒学の学者)であつた脇蘭室が一文不知の田舎の女性、妙喜尼の伝記を書いて永久にその徳を伝えたことは儒者としては異例の美挙と言えるでしょう。そしてまた妙喜尼の信徳が、如何に高く輝いていたかを物語っているものと言えましょう。

蘭室は、彼女の伝記の初めに「厚く浄土教を信じ、日夜弥陀の名を唱え、事々に必ず仏恩と称した云々」と讃えているのであります。つまり、日々の生活の中で、善い事に出会つても、悪いことに出会つても、苦しいときも楽しいときも、必ず「仏恩」を讃えて念仏していたのであります。

ある日、夜がふけてからお寺に参つて拝跪していたところ、寺僧が気づかずに走り出た途端に彼女を踏み

つけたので、妙喜尼は気絶したのであります。寺僧は驚いて扶け起こしておおびを言ったところ、彼女はただ仏恩、仏恩と喜んでるので、彼は不思議に思つて、「こんなヒドイ目に出会つて何が仏恩か」と聞きただしたところ、妙喜尼が言うには、

「幸いに死から免れたは御恩でございます」と喜んで念仏しておつたと言われます。

またあるときは、ご飯を炊いているとき、あやまって手を釜の中に突つこんでヤケドをしたときも、まず口から出た言葉はやはり「仏恩仏恩」であり、それにつづくものが念仏であつたそうです。それを見ていた人たちは不思議に思つて、「そんなヤケドをして痛くてたまらないだろうに、仏恩と喜ぶのはどういうわけ

か」と訊くと、彼女の言うには、「こんな痛い目に出会わなかつたら地獄の苦を忘れていたので、こんな痛い目に出会わせていただいたおかげで地獄の苦を幾分でも知らせて頂くことができたのは御恩でございます」と答えたそうであります。

あるとき人が妙喜尼に向かつて、「あなたは他人から打たれたり悪口を言われたときに

腹を立てるか」と尋ねると、妙喜尼は、「いやいや腹を立てるどころではありません。いつも忘れがちになつている地獄行きの自分を知らせて下さるかと思えば、御恩さまと喜ぶほかはありません」と答えたと言われています。

まことに信徳のなさしめか、彼女は命終るまで疾いなく、他人の厄介にもならず、御開山聖人と同齡の九十歳をもつて、安らかに大往生を遂げたのであります。

(佐々木蓮磨『安心清話』より) (了)

《 念佛寺永代経法要 》

四月二十二日 (火)

午前十時始

午後二時始

法話 住職

(どなたでも自由におまいりください)

清沢満之先生に学ぶ②

求めているかという時に、「現在はまだまだ幸せではない。」

うな理想の状態になれなかつたら、「うらめしい」で終わる。だから、「幽霊に足がないのは、現在に立っておられないからである」と先輩から聞いたことがある。

ひと思い、移り変わって止まないからです。迷いというのは、端的に申しますと、自分の「思い」に重きを置き、「思い」を中心に生き、「思い」をよりどころにしているすがたです。一念を確固にするというのは、自分に起こってくる「思い」を固めることではありません。一遍上人の歌に、

我々が若し将来に立って

我々はかような誤りに陥らず、脚下を固めねばならぬ。

まだ途中であつてもう何年かすると幸せになれる、だから今がんばるしかない」といような発想をしやすい。

いつでも生きている現実は今ここしかない。「今ここ」が続いていくばかりです。

「思い」をよりどころにしているすがたです。一念を確固にするというのは、自分に起こってくる「思い」を固めることではありません。

いるものであるならば、宜しく将来を望み将来に憑るべきである。けれども我々は現在に立って居る。現在に立ち現在に生きているものが、将来を自分の立場として何の益に立つか。現在が続いて将来となる。然るに将来を望みて現在に見ぬものは、現在を捨てて将来に立とうとするものである。

いかに外界の襲撃が激しくても、決してそれがために崩されない堅固な基礎を固めなくてはならぬ。即ち我々は現在の一念を確固にせねばならぬ。

た例えば学業のことにして、中学での勉強は志望校の高校に入るためであり、高校の勉強は志望の大学に入るため、大学の勉強はい会社就職するため、という具合で、いつも将来の希望を実現するための「今」であつて、いつでも「幸せになるため」「希望を実現するため」のプロセスとしての「現在」でしか生きていない。こういうことが多い。

「私」は、「現在ただ今にいる私」の他にはありません。また過去を懐かしく思ったり、後悔したり、いろいろ思うものですが、これは過ぎ去つたことであつて、これらは真の「現実」ではありません。本当の現実「現在の事実」であつて、今ここで経験しつつある事実こそ、本当の現実です。

心より 心を得んと
心得て 心に迷う
心なりけり

その人の精神は現在に於いては少しも立場を持つておらぬ。現在に安住する基礎を持つて居らぬ。然るに世間の事変は現在に襲来して止まぬ。その人はどうして之に当たることができようか。その人は当然躓き倒れ

「一念」という文章の一節です。先月の清沢先生の文章は「現在の立脚地を確立せよ」という趣旨でした。今回は同じ点をもう一度「現在の一念」というところに焦点を当てての内容です。

現在の一念とは「現在のひとおもい」ということです。この「ひとおもい」を確かなものにせよと先生はおっしゃるのです。

この現実の「ひと思い」、いわゆる現在の一念を確固にするとはどういうことでしょうか。もしも私たちの上に次々と湧いてくる「思い」を支えにしようとする不安定になるのは当然です。私たちの思いはほとんど妄念であつて、非常に不確かなものです。ひと思い

つでも今すでにここに来て、はかりないのち(アマダ)と今の私がであうこととです。アマダ仏と離れない、いつでも「アマダ仏と共にいる」ということを知ることです。いつでも今ここに「アマダ仏はまします」ことを実感する。それを真宗では「信の一念」と申し

か。その人は当然躓き倒れ苦悩煩悶し、遂に人を怨み天を呪わねばならぬ。かく現在に在って苦悩している者が、何時安寧満足の地に進むことができるであろうか。極めて覚束ないことである。

現在の一念とは「現在のひとおもい」ということです。この「ひとおもい」を確かなものにせよと先生はおっしゃるのです。

現在の一念とは「現在のひとおもい」ということです。この「ひとおもい」を確かなものにせよと先生はおっしゃるのです。

この現実の「ひと思い」、いわゆる現在の一念を確固にするとはどういうことでしょうか。もしも私たちの上に次々と湧いてくる「思い」を支えにしようとする不安定になるのは当然です。私たちの思いはほとんど妄念であつて、非常に不確かなものです。ひと思い

つでも今すでにここに来て、はかりないのち(アマダ)と今の私がであうこととです。アマダ仏と離れない、いつでも「アマダ仏と共にいる」ということを知ることです。いつでも今ここに「アマダ仏はまします」ことを実感する。それを真宗では「信の一念」と申し

問いに学ぶ

とです。

お念仏そのものが何であるかをよく聴くことが大事で、お念仏を称えている私の心に浮かぶ考えとか思いとか苦楽を眺めることではありません。お念仏そのものを聞くのであって、称えている我が心をなんとかするのではありません。南無阿弥陀仏と口に現れ耳に聞こえる、それはアマダ仏の大悲のはたらきによるのです。アマダ仏は法蔵菩薩の時、衆生を救おうと発願し修行し成就して、その救いを衆生に知らせる事によって衆生を救いたいと願われました。知らせて救いたいという願は、法蔵菩薩の四十八願の中のことに第十七願です。第十七願ですが、その十七願をさらに重ねて誓われ三誓偈の十七願に、「我仏道を成るに至りて名声十方に超えん。究竟くきやうして聞こゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ」と、無量寿経に説かれています。この文言は非常に大事な有難い言葉です。法蔵

お念仏はアマダ仏が、私のところに現れ出てくださる行い（大行）であって、私の喜怒哀楽を超え、私の行いや考えや感情などの善し悪しを超えています。阿弥陀様は私の思いの全分を超えているだけではありません。せん・私の全体を摂めとり、私の存在を成立させてくださっている実在であり広大なほたらきです。そのほかりないのちのはたらきが、私に「ここに汝と共にいる」「汝をつかんで離さない」とお知らせ下さる大悲の仰せのはたらきとしてのお念仏であり、声です。

西田幾多郎の歌に、
我が心 深き底あり
喜びも憂いの波も
とどかじと思ふ

というのがあります。この「心の深い底」とは心の中ではありません。心を超えて心を成立させてくださっている実在のはたらきのこ

(Aさんからの質問)
確かに念仏申していると、気持ちがあつと楽になる瞬間があるにはありますが、その時だけの気分のように感じるのですが如何でしょうか？

また側で家族が病気の痛み等で苦しそうな時に念仏申して自分だけ楽なようになる事に後ろめたさを感じるので、この点如何でしょうか？南無阿弥陀仏。

*

お尋ねの件、お念仏は私の行い（修行）として称える念仏ではありません。自分の行いとして称えている念仏だと受け取りますと、「称えて自分を楽にしよう」とか「自分だけが楽になろう」として念仏ではだめではなからうか」というような思いや疑問が湧いてくるのではないのでしょうか。

於いて成り立っているのです。いわばいつでもアマダ仏によって生かされているのです。ですから私たちはどうなるうとこうなるうとアマダ仏のいのちの中であり、ここを離れることはできない、確固たる地盤に置かれて行っているのです。これを知ることが揺るぎない一念、確固たる一念ということになります。

浄土真宗で言う「信の一念」というのはこのような一念です。要するにアマダ仏のはたらきであった一念であり、アマダ仏は今ここに私たちにであいを求め、私たちに「いまここに汝と共にいる」「汝の全分を引き受けている」と仰せくださっているのです。それがお念仏の一声です。一声の念仏は、アマダ仏の名のりの声です。名声です。この名声である南無阿弥陀仏を称え聞くことにおいてアマダ仏とのであいが起こるので

(了)

ます。この一念の信心はひとたび起こると消えないのです。それで「金剛堅固の信心」ともいわれます。要するにアマダ仏とであうことが一念を確固にすることになるのです。現在の一念が無限なものに結びつく、そういう「ひと思い」です。これ以外の「思い」は流動しづめ、動きづめですから、非常に不安定なのです。いつでも今この現在の事実は、だれでもいつでも「常にある事実」です。喩えていいますと、川の水は一瞬一瞬流れ去って行きますが、川底は流れ去らず、いつも川の水に離れずに在るようなものです。一瞬に流れ去って行く「思い」の流れが成り立っているのははっきりしないのちのはたらき、すなわちアマダ仏のいのちのはたらきによって成立しているのです。この「ひと思い」は根拠なしに起こっているのではありません。はっきりしない力に於いて起こっているのです。思いだけでなく、私のいのち全体がアマダ仏のはかりないのちに

菩薩は衆生にご自身とその救いを知らせようとして、南無阿弥陀仏の名声(名号)となつて十方の衆生に「聞かせたい」と誓われ、この願を成就して現在にはたらいとおられます。ここに大きなアミダ仏の大悲のお心があります。私の方からアミダ仏にあうことはとてもできませんが、アミダ仏の方から、「(かわいいそうだ)」と大悲のお心からあいに来て下さつて呼びかけておられる、その大悲のはたらきが今口に称えられ耳に聞こえる一声の南無阿弥陀仏のお声です。

松並松五郎さんは、このお心を、

よびづめたちづめ

まねきづめ

弥陀はこがれて

あいにきた

そのおすがたが

南無阿弥陀仏

また

いつも流れる念仏は

ここにゐるその声なれば

いま招かれて

南無阿弥陀仏

と歌つておられます。こ

のようにお念仏はアミダ仏の大悲のご念力によつて、口に現れ耳に聞かせてくださるまことに有難いはたつき(大行)です。ですからこれは私の側から出てきた(私の行い)ではありません。私の行いと受け取るから、「このようなお念仏でいいのかしら」という疑問が湧くのです。そうでなくて、今ここに囚らずも私に会いに来てくださつてゐる大悲の阿弥陀様のお心をよく聴くことです。

* * *
次に(Bさん)

先生は、お念仏のはたらきを、言葉でどのように表現されているでしょうか？
如来のはたらきを、どのように感じておられますでしょうか？
もしよければぜひ教えてください。

お尋ねの件ですが、南無阿弥陀仏と口に称えられ、耳に聞こえる一声一声のお念仏は、ごく端的に言えば「(アミダ仏が私とともに)ここにゐる、(全分を)引き

受ける、(救いなき汝を)助ける」の大悲の仰せと知らされます。

元々「南無」を聖人は「よりのため、よりかかれ」と仰せられていますので、南無は「たのため、まかせよ」の意味。「阿弥陀仏」は「摂取して捨てないはたらき」で「助ける」「引き受ける」の仰せですから、「南無阿弥陀仏」は「助けるからまかせてくれよ」の慈悲大悲のアミダ仏の喚び声して伝統されてきました。その通りだと思ひます。

なぜ、「まかせよ」と仰せられるのか。それはアミダ仏は私たちを「行き詰まつて救いなき者」と見ておられるからです。自分の罪や煩惱やむなしさをどうすることもできず、死へと急ぐ者であり、死してどうなるか全く不透明な中に放り出されている存在だからです。このような者を全面的に引き受けて仏にし、他の衆生を無窮に救う者にしたというのが、アミダ仏の願いです。(了)

【住職雑感】

先月、二階の書齋で椅子に座つていると、頭に何か落ちてきたものだから手を当てると、さつと首から下に降りていくゴキブリを発見、もうこれで二回目である。なぜこんなところにゴキブリが来るのかと思いつつ、捕まえて外に出そうと思うがとにかく素早いのでどこかへ逃げていった。翌日二階の踊り場で弱っているゴキブリを発見、捕まえて庭に戻したが、どうなったのであろうか。またこんなこともあった。二月のことである、近くの河原に散歩に行つての帰り道、どーんと頭に重いものを感じて、上を見るとカラスが飛んでいった。カラスが頭に止まつて飛んでいったのである。これは初めての経験で、いささか奇妙な経験になった。青色の帽子をかぶっていたので寄つてきたのかも知れない。またこの二月にご法事のた

め、和歌山行きの南海電車を新今宮駅でまつていた。寒いので自動販売機でミルクティ(一四〇円)を買おうと思ひ二〇〇円を入れると、六〇円おつりが出たが現物が出たこない。ボタンを何度もおしても出ない、隣りにいた人も「おかしいですね」と言っていたが、電車が来たので乗る。これも初め

ての経験であった。

こういうことは、非日常的なごく小さな経験であるが、しかし本当は一日一日が新しいまっさらな経験である。同じ事は二度と起こらない。新鮮な一日を新鮮な気持ちで受け取ることはなかなか難しいが、「二度とない人生」の一日をまっさらな感動をもって受け取りたいものである。

三月二日、念佛寺の彼岸会を勤修。参詣者は八人。初めて来られた方もあった。ホームページを見て来られる方が最近時々ある。お寺の法要に参加するのを大層に考えている人が多いが、そんなことはない。だれでも自由に参加してよい。どのだれであろうと出入り自由で、登録することも必要はない。皆さんと共に阿弥陀経を誦読。そのあと、「唯信鈔」のお話を一時間あまりする。その後、帰敬式を申し込まれていた三名の方に式を執行する。帰敬式とは仏教徒になるといふ儀礼である。キリスト教会でいう洗礼に似ている。おかみそりをし、法名(釋〇〇)をお渡しして、少しばかり帰敬式の意味についてお話をする。三誓偈を共に勤行。最後に一緒にスマホで写真を取る。(了)